

共生社会の実現に向けた生涯学習支援に係る実践研究事業

第2回コンソーシアム連携協議会 協議の記録

(中部) 地区 (8月27日)

【出席者】

県立清武せいりゅう支援学校	校長	横山 貢一
宮崎大学教育学部学校教育課程発達支援教育コース	准教授	若林 上総
学校法人宮崎総合学院 宮崎福祉医療カレッジ社会福祉士学科	専任教員	保田 浩美
社会福祉法人宮崎県社会福祉協議会	地域・ボランティア課長	大山 晃代
有限会社サン・グロー	代表取締役	濱門 康三郎
一般社団法人 宮崎県手をつなぐ育成会	理事	井上 あけみ
宮崎市肢体不自由児・者父母の会連合会(県副会長)	会長	田中 聡子
特定非営利活動法人 障害者自立応援センターYAH! DO みやざき	副理事長	山之内 俊夫
宮崎市教育委員会生涯学習課	主任主事	松岡 真一郎
新富町社会福祉協議会	係長	嶋末 剛
県福祉保健部障がい福祉課	主幹	元長 貴司
県教育研修センター教育支援課	副主幹	疋田 雅樹
中部教育事務所	指導主事	佐藤 賢

【協議の記録】

1. 実践研究団体の報告について

○ ライフカンパニー新富 井上さん

- ・ 現在のコロナの状況もあり、なかなか活動することができていない。
- ・ 生涯学習を始めるにあたり、何からスタートすればよいのか。まずは、楽しいことから始め、それから信頼関係を築いていきたい。
- ・ 1月までの4回の協議会だけでは、どのようなニーズがあり、それを引き出すことは難しい。委員のみなさんの意見も聞きながら、一緒に考えていきたい。

○ YHA!DO みやざき 山之内さん

- ・ 「生涯学習」とは「学ぶ」ということだが、実際障がいのある方には、学校卒業後、自宅と福祉事業所などの「線」でしか生活の活動範囲がない。まずは、人と人をつないでいく必要があるのではないかと。
- ・ YHA!DO みやざきの若いスタッフに聞いたところ、「ファッションショー」や「おしゃれ」「キャンプ」などを望んでいる声が聞かれる。
- ・ 実際に企画して、メンバーが膨れ上がっていくのがいいのではないかと。
- ・ まずは、「やってみたいことリスト」をつくり、その中からコロナの状況なども踏まえ、実現可能なことをやってみてはどうだろうか。

2. これからの活動について

- 協議会のみではなく、委員のみんなでZoomなども利用して集まってはどうか。井上さんや山之内さん達に丸投げにならないようにしたい。
- オンラインでヒップホップバトルを行っている取組も見たことがある。
- いろんなところで成功されている人の話を聞くのもいいのではないかと。
- 障がいのある方の中には学ぶ意欲を無くしている人がいる。本人たちのニーズを大切にしたい。

- 協議の場をつくる件に関して、共有掲示板をつくって協議ができる環境整備をしてはどうだろうか。「チャットワーク」や「SLACK」といったウェブ上のツールも活用できる。
- 委員のみなさんを「YHA!DO みやぎき」と「ライフカンパニー新富」のどちらかの団体のサポーターになっていただき、協力してもらってはどうか。
- 今年度は土台作りをし、R5年度以降、活動が実施できるように目指してはどうか。
- どちらの団体も、県の事業終了後も継続して実施していきたいという思いはある。
- 宮崎市としては会場を確保することは可能である。
- 新富町社会福祉協議会も用地を提供することはできる。
- ニーズを把握する際、学校で調査することができるが、それは在学中のニーズになるのか。
- ニーズを把握するにもさまざまなニーズがあり、年代によっては「働くためのニーズ」ということも出てくる。
- パラリンピックをとおして、目標をもって頑張ることの大切さを改めて感じた。ただ、頑張るためにはそこに「楽しさ」がないと難しい。学齢期のうちに夢をもって生きることの大切さを学んで欲しい。
- 「やりたいことをやる。」一緒になって、ワイワイガヤガヤとやっていければ良いのでは。

3. まとめ

- 2団体とも、R5以降も長期的にできるものを考えていきたい。
- 委員も応援していく態勢をつくっていくようにしたい。
- 大切なのは、当事者のニーズであって、そのサポートは私たち委員にもできる。
- まずは、所属やそれぞれの立場ではなく、個人的な立場でやっていってはどうか。私たちが楽しむことから始まるのではないか。
- まずは、委員のメールアドレスを共有する。
- これからの活動として、子ども・学校・学生のつながりをもたせたい。そのことで児童にとっても保護者にとってもメリットが多い。

共生社会の実現に向けた生涯学習支援に係る実践研究事業

第2回コンソーシアム連携協議会 協議の記録

(南部) 地区 (8月27日)

【出席者】

県立都城きりしま支援学校	教諭	川越 浩司
県立小林こすもす支援学校	主幹教諭	福崎 正浩
南九州大学人間発達学部子ども教育学科	准教授	野村 宗嗣 (欠席連絡あり)
特定非営利活動法人 宮崎県精神福祉連合会	理事長	桑畑 貴志
霧島おむすび自然学校	事務局長	壹岐 博彦
子どもと家族・関係者の集まり ポン太クラブ	会長	外山 明美
都城市教育委員会生涯学習課	副主幹	桑田 玲奈
小林市教育委員会社会教育課	主幹	戸高 明廣
南部教育事務所	社会教育主事	堀川 貴史

【協議の記録】

1. 地区別の活動について

- 現在まで高等部卒業を控えた生徒を対象に、卒業生や社会で活躍している方々を招き、様々な意見を伺う取組をおこなってきた。今後は、学校卒業後に充実した社会生活が送れるような、将来、学ぶ意欲の向上に繋がるような事業を展開する予定。具体的には、家庭科授業で調理講習を行い、社会に出た際、食生活向上維持に役立つような取組を学校で考えている。

- いろいろな団体と協力協働活動をしたい。

ボランティア人材がなかなか育っていない課題がある。そのため、南九州大学の野村先生を通じ、学生さんにボランティアの経験をしていただけるとありがたいと思う。大学としても、なかなかそういう実践の場が少ないという悩みがあると聞き、両者のニーズが合致するのではないかと。ボランティア養成を考えた取組を行っていきたい。

昨年、保護者から私達団体に対する期待や希望などをお聞きする機会があったが、それが十分に聞き取れてないため、保護者同士の話やボランティアへの要望を聞く場など、皆さんのニーズ、声を拾う場を年2回、開催したいと考えている。現状として、ポン太クラブ外山さんと、今年2回のキャンプを考え進めているが、1回目が雨天で実施できていない。冬場はスキーを考えている。

幅広い地域での活動をニーズに合わせた形で実現したい。

- 野村先生や壹岐先生、支援学校の方々のお手伝いができれば、お力になりたい。ポン太クラブは子供たちから大人まで幅広く、是非一緒に活動や参加をしたいと考えている。

2. 地区別の継続的な事業計画について

- 行政から、行政の事業として行いたい、という声が上がれば、コンソーシアムの意味があると思うし、形が残っていくと思う。

- ボランティアとして支援学校の職員、児童生徒の方など、いろいろな形で参加できるのではと思う。本日の話でも、地区活動は多々あるようだが、学校に周知されていない現状であるため、啓発等も含め今後の課題と感じている。

- 周知方法の工夫が必要。きりしま支援学校では、今まで卒業生の方に向けた情報発信は、卒業時に通信費(切手代等)を徴収し、運動会や学校祭などの案内をはがき等で行っていたが、今年の卒業生からは本学のホームページで情報発信をしていく手段を取ろうと考えている。運動会、学校祭、

成人を祝う会などホームページから閲覧可能な方法にしようと検討中。卒業生などが学校ホームページを見ると、学校が分かるという利点を利用し、ホームページで、様々な学校以外の労働福祉に関する情報も提供できるような、アクセスのポイントにしたいと考えている。

- 小林市教育委員会では、毎年、市民向けの公民館講座が行われている。ただ、実際に障がいのある方が参加する場合は支援が困難かもしれない。障がいのある方のニーズ収集をいろいろな団体や関係部署が協力し、形にしたいと県生涯学習課へ伝えている。今後、積極的に進めていきたい。
- 南九州の野村先生の方からお話をいただき、当施設利用者と大学生と一緒に卓球をして交流をした。野村先生主催の研修会の参加のお誘いもあった。(コロナ渦で中止となった)
大学生や高校生などの若い方をどのように取り込んでいくか重要で軸になると考えている。
- 国や県の事業は終期があるため、枠組みができ、お金の不要な取組ができるような取組ができればと思う。
- 障がいのある方の青年学級等の話を進めていく中で、社会教育課と障がい福祉課や社協など、他課や団体と繋がりを作っけて、活動が広がれば良いと考えている。
- 都城市の生涯学習課は、福祉部局との連携は行っていないが、福祉課では障がいのある方の趣味の教室を行っている。生涯学習課の講座は、どなたでも受け入れは行っているが実際の受講はない。
- 障がい福祉課が行っている教室を本事業にのせることで、多くの方に周知でき、内容の広がりもあるのかもしれない。
- 子どもの貧困、子どもの生活学習支援について、社協とこども課と協働活動している。
社協は、民生委員や公民館長など、地域との繋がりが強いため、地域関係は社協。
ポン太クラブでは、障がいの有無や年齢を問わず、絵画教室を行っていたが、今年から障がいのある方(高校生以上)を対象に助成金は申請せずに別途開始している。利用者はヘルパーなど福祉サービスを利用しながら、教室に通っており、福祉サービスを知らない利用者がサービスを知る機会になっている。
この教室が、どうしたら生涯学習の事業に当てはまるのか、具体的にどういった生涯学習に当てはまるのか知りたい。また、社協や福祉課とは日頃から連携しているが、予算等の話にはならない。チラシ配布など、こちらの状況をお伝えはしているが、それだけ。
- 南九州大学学生との卓球バレー交流と、身体障がいのある方へのサポートケア講習の活動、それに関わる講演を検討している。私個人としては、あらゆる障がいに関して、一般の方に講習会などを通して理解していただくことが、共生社会の実現に向けた一歩になると考えており、行いたいと考えている。ボランティア活動に学生等、若い世代を取り込むことも今後、互惠関係となると思う。
- 小林こすもす支援学校の同窓会と成人を祝う会は、同時開催している。卒業生への案内は、その他学校行事も含めフォローアップとして、事業所等を訪ねて行っている。今後はホームページ等の活用も検討が必要だと考えている。学校独自での生涯学習は継続が難しく、関係機関を巻き込んで何かできないか、検討しているところ。
- 最後に今後のやりとりのために、委員の連絡先を県が取りまとめて欲しい。

共生社会の実現に向けた生涯学習支援に係る実践研究事業

第2回コンソーシアム連携協議会 協議の記録

(北部) 地区 (8月27日)

【出席者】

九州保健福祉大学臨床心理学部臨床心理学科	講師	戸高 翼 (欠席連絡あり)
県立特別支援学校 PTA 連絡協議会	会長	甲斐 麻央
日向市地域福祉コーディネーター連絡会	地域福祉コーディネーター	成合 進也
株式会社グローバル・クリーン	代表取締役社長	税田 和久
一般社団法人宮崎県作業療法士会	作業療法士	内勢 美絵子
宮崎LD・発達障がい親の会 フレンド	会長	猪股 重子
旭化成アビリティ延岡営業所 総務課	総務課	笠 里美
延岡市教育委員会社会教育課	主任主事	串間 信之
日向市教育委員会生涯学習課	課長補佐	治田 健吾
北部教育事務所	社会教育主事	佐藤 良衛

【協議の記録】

- パラアスリートの講演会を考えている。
- チャレンジド・プロ研修での清掃研修も考えている。
- オンラインでの開催も可能ではないか。
- とても良い企画と思う。他に企画を考えている人がいなければ、税田さんの企画を進めていくとよいのでは無いか。
- 昨年度、清掃スキルがオンラインでも学べると良いという意見もあった。パラアスリートの講演会は、講演なので、プログラムも追加できると良い。
- 個人としても何らかの形でお手伝いしたい。
- 手をつなぐ育成会の中にもパラアスリートがいると思う。
- 頑張っている人も登壇してパネルディスカッションはどうか。
- 外出が難しい人が視聴できるので、オンライン講座が良い。
- 手をつなぐ育成会で広報誌を発行しているが、発行部数が500部なので、行き渡る人が限られている。
- 熱が冷めないうちに取組を広報できると良い。
- 行政として出来ることについて考えたが、広報活動については可能。
- さまざまな団体が絡んだ取組のアイデアがあれば、何かできないかと思っている。
- 色々な障がいの人がいる。その人目線で取り組んで欲しい。
- 共生社会の取組については、分からない部分もある。企業との連携方法について教えて欲しい。
- チャレンジド・プロの取組は、家で実践できて良い。
- チャレンジしている姿を出しながら、理解してもらおう場として、様々な団体がつながりながら、実際の活動を行ってはどうか。

- 柔軟に動ける人材が欲しいがないので組織したい。人材育成が重要である。
- パラスリートの講演については、子供たちを参加させても良いと思う。小中学生を参加させてはどうか。前任校で当事者の話を生徒に聞かせる講演を行ったが、講演後、生徒が変わった。生で話を聞くことが重要であり、1つの講演で生徒が変わると実感した。
- 大学の地域作業療法学の授業で昨年のカンファレンスを視聴した。大学生にとってはとても良い刺激だと思う。
- 地域お助け隊みたいなサポートするネットワークを成合さんを中心に結成するのはどうか。繋ぐ人は必要である。
- 当事者の話について、以前、学校で自分の子どもの話をしたことがある。子どもは、知らないから遠ざけているし、大人が遠ざけてしまう。子どもはしっかり伝えれば大人より素直に心に入っていくので、講演も良いと思う。
- 実践を通してネットワークを形成するのはどうか。関わる人が学ぶ事が必要である。
- 実践については、今年度からでも可能ではないか。11月くらいから。
- 毎年7月に福祉のまちづくりフォーラムを実施している。有志で実行委員会を作り実施している。しかし、行政は誰も来てくれない。相手にしてもらえない。一緒に活動して欲しい。
- 取組を地域に知らせる必要がある。
- チャレンジ・ド・プロとして日向市役所のトイレ清掃をオンライン配信する計画がある。スキルアップにも繋がるし、働きがいも深めていきたい。
- 既存の仕組みを活動し、活動の幅を広げる。このような会を県北だけでつくり、自分たちで実行する場を設ける方向性でどうか。
- 地域単位、小さい単位で活動したい。
- 生徒に講演を聴かせる話も出たが、学校を巻き込むにはどうしたらよいか。
- 学校を動かすことはなかなか難しい。研修として教職員に参加してもらうのであれば、悉皆研修にしないと参加数がある程度見込むことは難しい。
- 予算、バス移動、課題はあると思うが、是非実施したい。
- 自主性を大切に、学校を絡めてパッケージ化してはどうか。
- 同じ趣味を持った人同士で集まった方がうまくいくのではないかな。
- 共生と余暇、どっちに近づいていくのか。
- 障がい種が限定された方が絵に描いた餅にならないのではないかな。
- いつでも、だれても、どこでもが理想だが、現実はなかなか難しい。